



サケは、なぜ産卵のとき大きく口を開けるの

サケは、川で生まれ、海でおとなになる

サケは、川底に産みつけられた卵からふ化し、体長が5～7センチメートルに育った春ごろ、川を下って海に旅立ちます。このころには、体の色も銀色に変わっています。北の海で3～5年間、サケは、ほかの小魚やイカなどをおなかいっぱい食べてすごします。体長が80センチメートルぐらいまで大きくなると、サケは、生まれた川を探して、卵を産みに帰ってきます。卵を産むためにだけ、自分の生まれた川に帰ってくるのです。このときのサケは、いっさいえさを食べなくなり、命がけで川を上ってきます。そして、中流付近の川底に穴をほり、オスとメスは、協力しあって卵を産みます。

卵を産むのは大仕事

1匹のサケが産む卵の数は、2600～3800個にもなります。体内に入っている、これだけたくさんの卵を一気に産むために、サケは全身に力を入れてふんばり、産卵します。オスもメスも大きく口を開けるのは、体に力を入れているからです。メスの産卵に合わせて、オスも、自分の精子(オスの体質や性質を伝えるもの)を、一気に水中におし出します。卵と精子がいっしょにならないと、卵は、ふ化できないのです。

産み終わると、メスが、しっぽを使って卵をうずめます。そのため、しっぽやひれや皮ふは、ぼろぼろになります。産卵が終わると、メスもオスも力がつきて、死んでしまいます。川底の穴に産みつけられたサケの卵は、およそ60日くらいでかえります。サケの子魚は、およそ50日後には、おなかの卵黄がなくなり、水生こん虫などのえさを食べはじめます。そして、春になれば、川を下り海に出ます。(監修・安部 義孝)

